

「カルテ」による教育方法

播 本 秀 史

はじめに

2013年度から4年生に「教職実践演習」が開講される。教員養成の集大成的な科目と位置付けられている。これまで、演習科目としては「総合演習」があったが、それと抜本的に異なるのは「カルテ」が必須とされていることである。寡聞ながら、「カルテ」による教育方法は上田薫の考案であろう。かつて、上田は「医師の場合にだれもがその必要を疑わないカルテが、教師の世界で全くといってよいほどかえりみられずにきたことは奇怪というほかない」⁽¹⁾と疑問を投げかけたが、時代がやっと、上田に追いついてきたのだろうか。ただ上田や、彼が長くリードしてきた「社会科の初志をつらぬく会」⁽²⁾の提唱する「問題解決学習」と文部省（当時）の唱える「問題解決的学習」とが似て非なるものであったように、文科省のこの度の「カルテ」と上田のそれとも、根本的な相違があるかもしれない。しかしながら、上田の「カルテ」の理論を生かすことによって、文科省のそれもより意味あるものとなろう。ここでは、上田の唱える「カルテ」の検討と、それを文科省の提唱する「カルテ」と関連づけて「教職実践演習」を遂行するにあたっての試論とする。

1. カルテの理論

1) 驚き・矛盾を繋ぎ合わせる

「カルテ」とはもともと医者が患者の生年月日、年齢、体躯、性別、病歴、症状、病名、治療方法、治療効果等を記録するものであろう。また、様々な症状を繋ぎあわせ、病名を決定し治療法を確立する役目もはたすのだろう。上田の唱える「カルテ」もこの理屈で考えれば理解しやすくなる。症状・矛盾を繋ぎ合わせて病気や人間を探究するわけだ。

「カルテの表現は簡潔でなくてはならない。教師がその子について驚いたことを、すかさずとらえたメモがそれを構成しているのではなくてはならぬ。そのようなメモが、したがって矛盾をはらんだメモがいくつか、いや数個つなぎあわせられ解釈され」⁽³⁾ 云々と言っている。

「カルテ」に基本的データは必要だが、なんでもかでも書き込む必要はない。いや、たくさん書いてはいけいないのだ。多いとかえって見えなくなる。あくまで、驚いたこと・症状をメモするのがよいようだ。

単なるデータなら文字を埋めることは可能だ。しかし、ひとり一人の学生について「あれっ？」とか「えっ？」とか感じることは、私立大学のしかも大規模校ではなかなか難しいかもしれない。上田の理論は主として小学校での授業を対象としている。上田が40年間にわたって指導してきた静岡市立安東小学校を筆頭に信州などの地でも、上田の「カルテ」を使った実践が展開されてきたが、いずれも小学校であった。上田の「カルテ」は大学では不可能なのか。私立大学をはじめ戦後の開放制教員免許制度の下での教員養成においては、上田の唱える意味での「カルテ」を実践することは容易ではない。文科省は国立大学を中心に教員養成を考えるだけでなく、私立大学における教員養成の充実をはかる政策を展開してほしい。「教職実践演習」ならびに「カルテ」を課す

からには、それが実質的に可能となる教員配置を考えるべきであろう。戦後の開放制教員免許制度の危機である。しかし、転換点として未来に繋げる途を模索したい。ただ、旧師範学校的な教員養成の非の上に開放制があることを忘れてはならないだろう。

さて、現実的に「カルテ」に対応しなければならない。主として1, 2学年までは、学生がカルテに履修した科目名や抱負や反省等のデータを記入していて、教員側が「カルテ」に記入しているわけではないだろう。大学によっては異なろうが、実態はそんなところではなかろうか。私立大学、特に中規模以上の大学においては、開放制の免許制度の下、1年生から教員が「カルテ」をつけることは無理である。しかし、いよいよ4年生になり、多くは6月に教育実習を終え、秋学期（後期）に「教職実践演習」を履修するようになれば、教員もカルテを利用した指導や学生とのキャッチボールが展開される。そしてそれは、確かに教員養成の一環として重要なことであろう。しかし、この場合でも、時間・空間を生かし、ひとり一人に対応する上田の「カルテ」の実践は困難をとまなう。極端な場合、4年生後期になって初めて出会う学生もいるかもしれないからである。ただ、文科省の唱える「カルテ」が、データの記録と若干の所見をつけた「通信簿」的なものを想定しているならば、なんとか対応は可能だ。しかし、上田の「カルテ」は驚き・矛盾を繋ぎ合わせて、人間理解に迫る教育方法である。

教員養成は開放性が継続せられるとしても、かなり特化したものとなりそうである。教員養成の6年制化や教職大学院の動きから見てとれよう。「カルテ」や「教職実践演習」がその梃子の一つにされているように思われる。

2) カルテの具体的なつけかた

上田の「カルテ」の具体的な書き方を筆者なりに解説する。

前提

- ・人間は必ず予見、偏見でもって人間を見る。その具体的現実から出発する。
- ・といっても、予見・偏見は望ましいものでない。出来る限りその被害をより少なくする必要がある。
- ・その方法のひとつがカルテである。方法だが、人間観に関わる哲学が基底にある。

1. 予見か偏見か、とにかくバイアスをかけて人は人を見る。教師も例外でない。いや、むしろ、この子はこういう子だと決めつけることがある。自分の見方を絶対化する傾向が見られる。教師の罪の深さを知るべきであろう。カルテは自己を相対化する視座をもたらしものである。
2. 偏見で見ていたとしても、そうした中で「えっ」とか「あれっ」とかそれまでの見方を変える場面に出くわす。それをメモする。まれに驚かない自信家や意固地な人もいるかもしれない。そういう度し難い人にカルテは意味をなさないかといえ、そうでもない。人間は根源的に人間の力ではどうしようもないものと、対峙して、あるいはそれを内包して、あるいはそれと相即的に生きている。誰も不安や不条理の中で生きている。驚かない、すなわち自己を絶対化する人も自己に驚くことはありうる。怪我するし、病気にかかるし、老いてゆくし、死に瀕するし、である。
3. メモしたことを、そのままにしておく。一つの驚き、一つの矛盾でその人を捉えられる訳はないからである。医者是一个の症状だけで病名を決定することなどしないであろう。上田はそのままにしておくどころか「忘れていてもよい」⁽⁴⁾と言っている。その理由は「人間を動かすものは記憶ではなく思いおこしである」⁽⁵⁾からによる。
4. しばらく経って（人によりメモする時期が異なる）また、「あれっ？」と思う事にでくわす。それをメモする。「2」の「あれっ？」とは別種、別角度、別位相のものの「あれっ？」が望ましいが、別に同じような「あれっ？」

でもかまわない。メモを見返して、自分自身を知るよい機会になる。

5. 二つの「あれっ？」驚き・矛盾がメモされているが、そのままにしておく。無理に解釈しない。診断しない。ふたつくらいの矛盾・症状でその人を解釈・診断すれば、医者ならヤブ医者となる。
6. しばらく経って（人により驚きに出くわす時が異なる）また、「あれっ？」に出くわす。それをメモする。
7. 三つか四つの「数個」の「あれっ？」が集まったところで、はじめて「あれっ？」を解釈する。
8. 大切なことは、その解釈はあくまで仮のものと捉える。上田の言葉を借りれば「仮構の一」⁽⁶⁾に近い。
9. また、その人のカルテをとり続ける。「1」にまた帰る。ただ、この時の「1」は初めの「1」とはまた違う。

ここで分かるように、「カルテ」は時間・空間を生かした人間理解の方法である。医者のように採血したり、聴診器あてたり、医療器機で調べることはできないので、観察を専らとするが、対話において働きかけをすることはできる。しかし、無理に試すようなことをする必要はない。付ける側の姿勢、在り様で相手を変化してしまう。また、予め枠をつけて相手に対することになる。緩やかに、自然に、時間・空間を生かした対応が肝要である。それが過程を生かした対応となる。ともかく、症状・矛盾を関連付けて病気、人物を探究する手法は同じである。

3) カルテは意味があるのか

「カルテ」をつけても、けっきょく無意味ではないか。その人の真の姿は、その人のことは仮の像でしか、分からないままではないか、という疑問を検討する。

極端な話、人間はいつか必ず死ぬ。何故生まれたのか自分自身分らないまま生まれてきて、生まれたからには必ず死ななければならない。そんな中でもともかく生き続けている。どうせ死ぬのだから、結局無意味ではないかと今死んでしまう訳ではない。確かに例外はある。この例外にこそ人間性の神秘があるが、ここでは触れない。もう少し卑近な例で言えば、人間は満腹になっても時間が経てばまた食べる。食べなくてはならない。どうせ食べても無意味だからと食べないということはないであろう。言ってみれば、満腹というのは、いつも仮の姿となる。満腹は「仮構の一」なのだ。満腹の中にすでに満たされないものが在るのだ。満腹と相即的に空腹があるのだ。これは生と死とが相即的に在ることと同じだ。変なことを言うようだが、「満腹は満腹ならず」なのだ。これは、上田の動的相対主義の具体性の論理の中の一番目「AハAナラズ」⁽⁷⁾を敷衍した。妥当性については読者に委ねるしかない。動的相対主義については後に述べる。

また、たしかに、分からないといえ、分からない。しかし、自分自身を振り返っても100パーセント分かっている訳ではない。ましてや他人おや、である。

上田の言葉に人間がものごとを知るということに関して、認識は「わからないことからわからないことへ」⁽⁸⁾というものがある。カルテによってその人を分かったと思っても、あくまで仮で正真正銘その人を分かった訳ではない。分かったと思ったことは「仮構の一」なのである。「正真正銘の一」・普遍には達していない。だからけっきょくは「わからないことへ」となる。ここでも、「わかったことはわかったことではない」、となる。

しかし、この「わからないことへ」に意味がある。人間に的をしぼって考える。先ほど、自分自身も100パーセント分かりえない、と述べた。それが真実であろう。何故なら人間は変わるからである。たえず新たに生成・変化・消滅を繰り返す。死後の世界は保留するが、この生の世界において、人間は未来を

有す。可能性を有する。それゆえ生きている限り「一」にはなりえない。「一」はいつも「仮構の一」なのだ。「一」という「わかることへ」には到達しえない。それが人間の真の姿である。人間は「動的」なのだ。

カルテはそういう人間のありのままの姿をありのままに捉えようとする試みである。動くものを動くまま捉えようとする試みである。

捉えたものは「仮構の一」である。「わからないこと」が必ず存在している。満腹の中に空腹が内包されている。あるいは満腹即空腹となる。生の中に死が内包され、生即死として人間は在る。生は「仮構の一」、死もまた「仮構の一」なのである。

だから駄目なのではない。捉えたものに価値をおくのではなく、捉えようとする試み（過程）に意味があるという考えである。

「仮構の一へのあくなき志向こそ、もっともリアルなもののすがたであり、その過程をのぞいて実在するものはないと考える」「過程こそ実在」⁽⁹⁾と上田は述べている。

この場合「実在」の意味は存外難しい。かつて普遍をめぐる論争があったし、実在論にしても数種類あってどれもそれなりに難解である。筆者の解釈だが、上田は人間にとっての普遍は「仮構の一」であると考えているのではないか。したがって従来の意味での普遍は実在しない。普遍は「仮構の一」としてしか実在しない。これが上田における実在論かと推測する。上田は「過程こそ実在」と述べているが、もう一步踏み込んで、「仮構の一こそ実在」と言ってもよいのではないかと考える。「過程」と「仮構の一」は「二而一」「一而二」と筆者は考える。この考えの基底にあるのが、彼の「動的相対主義」である。

神についても上田の論を応用する。普遍である神も「仮構の一」となるはずである。人間が知りうる神は、神そのものではない。「仮構の一」としての神である。神学は時として、神の立場から考究されるが、上田の論は人間の立場からの論考に終始する。人間は神を真に知ることはできない。しかし、たしか

に神は「仮構の一」として存在する。

この場合、絶対者である神も「仮構の一」としてある、ことになる。絶対も人間にとっては「仮構の一」となる。相対的存在である人間が捉えることの出来る絶対的存在は、相対的存在というフィルターを通しての絶対であり、絶対そのものではない。

上田の論理は人間という具体的存在に即したものである。それに即する限り、従来の意味での絶対、客観的真理、実在、普遍はない。だが、新しい意味でのそれはある。物理学と対比させれば、よく分かる。次の節で検討する。

具体的な、すなわち動的な人間が、動的な人間を探究する。「カルテ」はその人間探究の一環である。

4) 知の転換としての「カルテ」「仮構の一」

「カルテ」とそれと相即の「仮構の一」の考えは、従来の知の枠組みを転換している。物理学の分野での相対性理論や量子力学に匹敵するものである、と考える。

相対性理論が現れる以前は、時間と場所は絶対的なものであった。客観的真理として座標軸で明確に示すことが出来た。ところが、光の速度だと、計測する条件によって、時間と場所が相対的なものとなることが分かった。従来の知の枠組みが通用しない場面が生じた。新たな絶対は秒速 30 万キロメートルという光速であって、条件によって時間はずれる、必然的に場所もずれる。「過程こそが実在」という考えに対応させれば、光速・動く速度こそが実在ということになる。従来の時間・空間は「一」ではなく「仮構の一」であったのだ。それが相対性理論で分かった。当然、ずれる時間・空間もまた「仮構の一」である。この「ずれ」を探究すること、言葉を変えれば、「仮構の一」を探究することが、上田にとっての絶対、普遍、真理、実在となる。「過程こそ実在」なのだ。人間にとって「一」は普遍的に「仮構の一」だが、なおかつ「一」を

目指し続ける、人間存在をそういうものとして上田は捉えている。到達した「一」は「仮構の一」であるゆえ、その「ずれ」をまた探究し続ける。「カルテ」とはその営みに他ならない。

量子力学においても、ニュートン力学以来、物質は粒子によって成るとされてきた。ところが、光においてその矛盾がマックスウェルの実験などで分かってきた。ボーアに至って、光は粒子であるとともに波動でもあることが「相補説」として理論化された。粒子と波動とは全く異なる概念であって、そんな矛盾するものが同居しているなんてそれまでの物理的常識では考えられないことであつた。西田哲学の言葉を借りれば、「矛盾的自己同一」もつと言えは「絶対矛盾的自己同一」ということになるのか。鈴木大拙で言えは「即非の論理」となろう。A と非 A とが同居している。相即な訳である。光は粒子である、これがニュートン力学における「一」であつたが、それは「仮構の一」であつたことが、量子力学で実証された。しかし、光は粒子であるとともに波動でもあるという「一」もまた「仮構の一」であろう。「一」で完結しないからである。未知なこと、矛盾は残るからである。例えば、何故、粒子と波動が相補関係でいられるのか、その内実の探究が残されているのではなからうか。哲学の分野でも「絶対矛盾的自己同一」がどのような構造・内実なのか西田によって、問い続けられた。問い続けることこそが、人間世界における実在である、と上田は考えている。その過程そのものが、実在であり、絶対であり、普遍なのだ。蛇足ながら、「即非」も含め、「絶対矛盾的自己同一」の構造・内実の一つが「逆対応」であることが、西田によって示された。しかし、西田によって掘み出されたこの真理も「仮構の一」であろう。「逆対応」の内実をまた探究してゆかなければならないだろう。西田は「逆対応」の概念を摘出した後、死去している。後世がどこかでその研究を続けているだろう。「一」は必ず「一」たりえない、矛盾が存する。上田の「ずれ」が在る。「一」は「仮構の一」でしかありえない。「仮構の一」を、言葉を変えれば「ずれ」を探究すること、これが

上田の認識論、存在論、価値論、すなわち哲学の核であり、全てであるとさえ考える。蛇足を重ねるが、「カルテ」は「ずれ」の探究である。

不確定性原理というものもある。粒子の運動の様を捉えようとすれば場所が曖昧になり、場所を特定しようとすれば、運動の様が曖昧にしか分らない、というものである。ハイゼンベルクの学説である。運動の様と場所が特定できない。「一」となりえない訳である。速度を測ろうとすれば、場所が特定できない。だいたいこの辺りということは分かるが、「ずれ」が必ず生じるというものだ。要するに「仮構の一」なのだ。こうして考えてくると、上田の教育哲学、いや哲学は相対性理論以後の科学の成果と呼応している。それまでの人類の認識を転換した知がそこにある。静的な知から動的な知への転換である。物質の真理に相対性理論や量子力学がより迫ったように、上田の「ずれ」の理論は、より人間の真理に肉薄した知である。

不確定性原理に関係すると思われる上田の言葉に、未来とは「予測はできても絶対に決定することのできぬ条件」⁽¹⁰⁾ というのがある。だいたいの見当はつく。しかし、決定はできない。未来には、人生には、「偶然」があるし、「出会い」もあるし、「偶然」としてのまた同時に「必然」として「死」もあるからである。「カルテ」は「偶然」を捉える営みである。「ずれ」を捉える営みである。「可能性」を捉える営みである。

2. 「カルテ」・「仮構の一」の理論の基底にある動的相対主義

1) 具体性の論理…

上田は自らの教育哲学を「動的相対主義」と呼ぶ。「具体性の論理は動的相対主義の論理であり、未来性の論理である。それはプロセスの論理であり、ずれを基盤とする論理である」⁽¹¹⁾ と述べている。これまでの「カルテ」や「仮構の一」そして「ずれ」も全てこの動的相対主義の具現である。

上田は「動的相対主義」を「実存の問題」⁽¹²⁾とも述べている。ここからも分かるように、人間を対象とした論理であると言えよう。それは、次の言葉からも分かる。

「動的相対主義はたんなる相対主義ではない。それは絶対に到達しえないことを明確にしながら、しかもなおどこまでも絶対を志向しようとする生きかたである」⁽¹³⁾。

では、その論理とは如何なるものかを検討する。

1. 「A ハ A ナラズ」
2. 「A ハ A ナラザラントスルユエニ A ナリ」
3. 「A ハ A ナラントスルモノノ仮象ナリ」⁽¹⁴⁾

1. 「A ハ A ナラズ」は西洋の論理になじんだ者には理解しがたいものであろう。「A ハ A ナリ」という同一律、「A ハ非 A ナラズ」という矛盾律が一般的論理である。これならよく分かる。しかるに、「A ハ A ナラズ」とは何か、と思われるであろう。しかし、これまで述べてきたことを勘案すれば、比較的容易にこの論理が理解できるのではないだろうか。

生きた世界、具体的に動く世界にとって、これまでの論理は静的な抽象的なものであった。具体的に動くものを動くものとして、その実態に対応する論理ではなかった。物理学の世界でも、ものを具体的にその実態に依じて探究すると、出てきた論理が「相対性理論」であり、「相補説」であり、「不確定性原理」であった。また、「ゆらぎ」という概念も動的な物質把握の一例であろう。この物理学における成果と共鳴するのが哲学における上田の「動的相対主義」である、と考える。

「A ハ A ナラズ」の意味は「A は仮構の一である」に同義である。A は A ではなく仮構の一としての A なのだ。A は必ず「ずれ」を有している。したがっ

て、「AハAナラズ」である。

これは、量子力学の領域のみならず、インド思想・仏教思想で考えてもそう言える。たとえば、俱舍論や中観でいう「生成、変化、消滅する」ものとしてのAや「空」・「縁起」の思想に照合しても、「AハAナラズ」と言えよう。「罪は罪ならず」で考える。西洋哲学では「実体」という観念がある。定義はさまざまだが、ここでは「それが存在するために他のなにものにも必要としないもの」としておく。神が実体、といえよく理解されよう。その筋で捉えると、罪も実体ということになる。原罪を考えるとどうしてもそうなる。その場合、「罪は罪である」「罪は罪でないものではない」となる。ところが、仏教思想では「罪は罪ではない」となり、「罪は罪ではないものである」となる。どういうことかと言うと、一つは、罪は実体ではない、ということである。「空」の思想に見られるように、実体という概念がない。すべて関係性のなかで生起する。要は「縁起」において生じる。これを「空」という。罪は空なのだ。

上田の「動的相対主義」も実体という観念を考えない。実体などというものはないとする。関係性を探究する論理である。インド思想、東洋思想の系列に位置する哲学であろう。動的なものに対応した哲学である。

「罪は罪ならず」「神は神ならず」である。自己との関係において、罪の「ずれ」を知る、「ずれ」の中に罪がある。同じく自己との関係において、神の「ずれ」を知る。その「ずれ」の中にこそ神は在る。生きて働く。

2. 「AハAナラザラントスルユエニAナリ」これは、これまでの検討を繰り返すことになるが、要は、Aは仮構の一であろうとするゆえにAである、ということである。仮構の一は終着をもたない。いつも途上にある。過程にある。「ずれ」を有する。その「ずれ」の中にAは存する。「ずれ」を追求する過程にこそ、Aは潜んでいる。過程こそがAであり、「ずれ」こそがAである、ということだ。

3. 「AハAナラントスルモノノ仮象ナリ」は、Aは仮構の一である、とい

うことだ。

まとめにかえて

文科省で唱えられている「カルテ」の教育学の分野での嚆矢としての上田薫の「カルテ」とその基底にある教育哲学について、論考した。上田の論理はあくまで人間の具体的現実立脚したもので、未来にかかわる教育の、すなわち人間形成のための論理であった。その論理は祖父の西田幾多郎のように独創的ではあるが、上田哲学とは呼ばず、上田教育哲学と呼ぶのが的確かと考える。

上田の「カルテ」と文科省のそれが、いかなる関係性を有するかについては疑問が付きまとうが、上田の理論を生かした教員養成がなされることを望みたい。そのためには、あらためて、教育とは何かが問い直されなくてはならないだろう。

注

- (1) 上田薫, 水戸貴志代, 森長代『カルテを生かす社会科——教師の人間理解』(『小学校社会科の授業 10』, 国土社, 昭和 49 年)。『上田薫著作集 3 ずれによる創造』(黎明書房, 1993 年) 328 頁。
- (2) 「社会科の初志をつらぬく会」別称は「個を育てる教師のつどい」。「日本の教育政策が系統主義の知識教育, 徳目主義の道德教育に大きく転換したことを批判し 1958 (昭和 33) 年に発足」した。ここでいう「社会科の初志」とは戦後の 47 (昭和 22) 年に発足した社会科の初志を指す。それは, 「新しい民主的な社会を主体的に創造する人間は子どもの切実な問題解決を核心とする学習によってこそ育つという考え」に基づく。日本の代表的な民間教育団体の一つ。
- (3) 『上田薫著作集 3 ずれによる創造』 263 頁。
- (4) 『同上書』 331 頁。
- (5) 『同上書』 264 頁。
- (6) 上田は「普遍はいかに求められても具体的には成立しえないために, わたくしはそれを『仮構の一』とよぶ」と解説している。『上田薫著作集 2 人間形成の論理』(黎明書房, 1992 年) 103 頁。

「カルテ」による教育方法

- (7) 『上田薫著作集1 知られざる教育——抽象への抵抗——』（黎明書房, 1992年）
320頁。
- (8) 『上田薫著作集2 人間形成の論理』254頁。
- (9) 『同上書』103頁。
- (10) 『同上書』127頁。
- (11) 『同上書』130頁。
- (12) 『同上書』135頁。
- (13) 『同上書』103頁。
- (14) 『上田薫著作集1 知られざる教育』320頁。